

【市外中学校の部 奨励賞】

## あ の 海

伊勢市立倉田山中学校 一年

杉田 理緒

目が覚めると、一面に青く、広い空がひろがっていた。ゆっくり起きあがるとそこにはさつき見た空のように広い海があった。潮がみちひきしている。やわらかな風に海の香りがのって、こちよい。そうだ、そうだ。散歩のついでにこの海に来たのだった。それであんまりきれいな海だからそのままここで、寝てしまったのだったな。つい忘れてしまっていた。そういえば最近、休みがないせいかどこでも寝てしまうようになっていたな。それにしても、この海はぐっすりねむれる場所だ。これまでつい寝てしまった場所の中で一番いごこちがよい。まるで時間がゆっくりと、ゆっくりと、自分に合わせて動いているようだ。人の通りも少なく、さわがしげな音などいっさいない。この海は一体なんなんだ。これ以上いると、またねむってしまいそうだ。今日はもう帰ろう。まだ、もう少しいたい気

もあるが、また明日来ればいいか。「また明日来るからな。」そう言って家に向かって歩き始めた。いつのまにかこの海に絶対の信頼をいだいていた。なんと不思議な海だ。ますます興味が高まる。でも、それに深い理由はないのだろくな。このやさしい香りが、ただ私をいやしてくれたのだろう。海は、こんなにもやさしいものだったのか。「ありがとう。」そう言ってさらに私は歩いた。その時には私の顔は、きつとやさしい顔をしていただろう。あの海へいったのだから。